
公園の月

阿山利泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公園の月

【Nコード】

N6736A

【作者名】

阿山利泰

【あらすじ】

公園での話し。これ以上語るのは無粋だね。

夜の公園、月夜の月を眺める。

手にとどきそうな大きな月が見える。

私はブランコに腰を下ろし空を見上げる。

今日の月は赤かった。

「おっ、これは先客がいたとは」

無精ヒゲを生やしたおじさんだった。

ちらっとそのおじさんを見てまた上を見上げた。

「ありゃ、嫌われてしまったかな」

うっとうしい、どこか行かないものか。

無駄にかまってくるな。

おじさんは隣のブランコに腰をかける。

「俺はこんななりだが月を見るのが好きだ」

なら私の知らないところで黙ってみてればいいのに。

酔ってるのだろうか、またちらっと見る、

月明かりながら確認するが顔は赤らんでない。

「明日から当分月なんて気にかけるような暇は無いだろうな」

グチをこぼすなら本格的に他をあたってもらいたい。

私は静かに月が見たいのに。

かすかにタバコのニオイがした。

不快ではない、どちらかと言うと懐かしい。

「ま、こんな話をしてもしようがないな」

そうだ、分ったならどこかに行ってくれ。

涼しい風が流れる。

「君としゃべったら結構楽になったよ」

一方的に言っただけだ、コッチの迷惑考えずに。

おじさんは立ち上がる、ブランコが揺れ少し音がする。

「じゃ、これでシッケイするよ」

そういつて手を振りながら消えていった。

何がしたかったのだろうか。

猫の私に話しかけて・・・

うつとうしいのがいなくなつて、

やっと静かに月が見られる。

おじさんが消えてしばらくした後、

タバコのニオイが思い出された。

やっぱり、懐かしかった。

夜の公園、月夜の月を眺める。

手にとどきそうな大きな月が見える。

私はブランコに腰を下ろし空を見上げる。

今日の月は赤かった。

（後書き）

はい。

作品に統一性があまり無い阿山利泰です。

特にこれが気に入って他の作品を読もうとする方は
しない方がよいと思いますよ。w
自分で言うのも変ですが。w
w
w

最後になりましたが読んでくださりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6736a/>

公園の月

2010年10月9日04時25分発行